

子と父

幼時のころから若い父親と二人暮らしのある父子家庭の話。父は外交が中心の仕事だから、子供はいつも車と一緒にだった。やがて保育所、今小学二年と成長し、はや父の手を離れたようだ。夕食は定まった食堂で一人することが多い。

最近、その店の奥さんから「お宅の子供さんはよほどパンが好きですね。いつもパンですよ」といわれ、父は不審に思つて子に問うた。子の答えは父の胸を貫いた。「僕は本当はハンバーグ定食が食いたいよ。でもメニューではパンが一番安いから」と。

「鉄平よ、遠慮するな。ハンバーグを食え」。やつと一言返すだけだった。彼はそして私に述懐した。「これからがみがみしかることを慎みます」。欲求不満などをいいたいけな幼児にぶつつけられるのも、二人だけの家族なればこそである。あまり神経質になることはない。しかし、子はこの父にとつて鏡である。父も学ぶ存在となつた。家の戸を一人開け閉めしても、迎える親はいない。かぎをかけるほどでもないから

かぎつ子でもない。憂き世の風はそのまま家に吹き込んでいる。この子にとって内も外も同じ空気の温度だから、心配することはない。ルソーは名著『エミール』で「貧乏人に教育は不要」という名言を残しているが、ここにぴったりである。自然の立派な教育がここにはある。

母のない寂しい家庭では欠落するものがあることは当然だ。しかし、それをそんなに心配することはない。たくましく幼い魂は育っているのだから。その証を一つ。彼は保育所も小学校も半日の欠席さえない皆勤だ。大変な気力である。少しの熱でほいほい学校を休まずマイホームとは天地の差があろう。

命とはどんな環境にもめげず伸びて止まないもの。しかし、それには条件が一つある。本気で彼を愛している人が一人はいると信じられることである。この子にはそれがある。

(一九八四年九月十日)